



かなであん

249-0002 逗子市山の根1-7-24

Tel : 046-871-1863 Fax : 046-872-3485

[http:// kanadean.net](http://kanadean.net)

mail: ryukeiji@kanadean.net

お釈迦さまの教え 『苦悩の中で仏になる』

私たちは、誰もがいつまでも若々しく、幸せな人生を送りたいと思っています。そのためにいろいろ気を遣います。お医者さまの定期検診を受ける上に、目にいい、膝にいい、惚けない、綺麗になる、痩せると言われれば飛びつきます。

テレビのコマーシャルの多くが「アンチエイジング」、つまり、若返り、年を取らないを謳ったもので、浅ましいと思いながらも惑わされずにおれませんが、気が付けば、自分自身が確実に戻る事の出来ない「老・病」の道を歩んでおり、例外なく死の淵に沈んでいかなければならない現実を突きつけられた自分がいます。

日本に存在する「言霊」という思想は、そのような言葉を聞くことさえ「縁起の悪いこと」として避け、災いが自分だけには来ないようにと願うあまり、しっかり向き合うことがないまま、かけがいのない一生を空しく終ってしまおうとしていることに気づきません。

* * *

この現実気づいた若きシヤカ族の王子がお釈迦さまです。恵まれた王子の座と家族を捨て

させ、王子を出家させたのは、人生の根本苦が生命の真理であるかぎり、目先の安心や楽しみを追い求めても、真の幸せにも楽にも至ることは出来ないという結論に達したからでした。その出家の動機を示唆する有名な「四門出遊（しもんしゅつゆう）」は、王子であった頃、お城の東西南北の四門からそれぞれ出遊し、老人・病人・死者・修行者に会い、人生の四苦を観じて、世の無常にふれ出家を決意するに至ったというものです。

* * *

何が起こるか分からない不安定な現実、そして必ずくる老いと死に対して、神や仏に祈って災いにあわないように護ってもらおうとする人々がいます。また、こうすれば逃れられるというものを試す人もいます。お釈迦さまの時代にも多くの宗教はそのようなことを説いていて、いろいろな宗教家がありました。お釈迦さまはじめは彼らに教えを受けられました。しかし、それらのいずれもが真の「救い」とはならず、正しく問題を解決する方法ではないことを知って、まったく違う方向から問題解決を見いだしていかれたのです。

それは、私たちが「苦」は、お金が無いから、病気だから、家族に恵まれないからなど、

原因が外にあると考えていますが、お釈迦さまは、むしろ事実はその逆であって、原因は私の方にあり、苦しみ悩みをつくりだしているのは、私の心であると見きわめられたのです。

このような世界をつくりだす正体は、いつも自分と自分を取りまわっているものに対して都合がよいようにとはたらく私たちの自己中心の心です。このように観察してみると、私たちが「苦」と思っているものとは、自分がつくりだしているものにおびえ、それと戦っているにすぎず、そのような悪夢の中にいることにさえ気づかずに迷い続けているのです。人類共通の苦悩の現実とは迷い、煩惱であると明らかにされ、そんな人間が仏になる道を追求めたのがお釈迦さまです。

仏教は、インドから中国、朝鮮半島を経て日本に至り届く過程で、国や時代の進歩、いろいろな思想の影響をうけて移り変わりながら伝承されたお導きです。聖徳太子の時代より日本人の根幹となってきた仏教です。私たちの仏道は、つねにお釈迦さまの教えに立ち返り、仏法に親しみ、ものの本当の在り方を見きわめる智慧の眼を開いていく人生を歩いていくことに他ならないのです。

合掌

奏庵法座
【花祭り】

日時
4月26日(土)
午前11時～

「真宗宗歌」
正信偈
法話
ご文章拝読
「恩徳讃」
～*～
おとき

山のどこかにまだ桜の花が残っているのか、玄関や開け放った縁側には花びらが舞い降り、一方ではタケノコが顔を出して谷戸は新緑へと移ってきました。散るも芽生えるも、「いのち」であることが、わが身の「寄る年波」とともに染みてきます。

この「生老病死」を悩み、恥じ、嫌う自分も、それらを免れ得ないと説かれたお釈迦さまが、ルンビニーの花園で誕生されたのが4月、「花祭り」として親しまれ、祝われてきました。春の一日、どうぞお参り下さい。

星野富弘の詩
「鈴の鳴る道」

花がきれいですねえ
誰かがそうって
うしろを過ぎていった
気がつくとき 目の前に
花が咲いていた
私は何を見ていたのだろう
この華やかな
春の前で
いったい何を
考えていたのだろう



花の名前を知らない
そのことが
今朝は ばかに嬉しい
花だって たぶん
自分に付けられている
名前を
知らないで 咲いている



おしらせ
10時過ぎより正信偈の練習をいたします。お時間に余裕のある方は少し早くおでかけ下さりご参加下さい。途中からでもどうぞ遠慮なくお入り下さい。(廣松)

“ぼっち”という言葉があるらしい。親元を離れ京都の大学へ進学した息子からの入学式の報告は「ぼっちだったぜ！」だったと、どこか誇らしげに嬉しそうに話してくれたお母さんから知った流行語だ。要は「ひとりぼっち」ということだが、教師である母親が子供の高校の入学式に出席するために、自分の職務、しかも新入生の担任を任されている入学式を欠席したということの是非が問われているのを聞いてこの言葉思った。■長い人生の中で考えると、入学式はひとつの節目でしかないことは確かだ、その日に担任が「都合が悪くて」いなかったことくらいで人生が左右されることはないだろう。ならば逆に、入学式に親がいなくなつて、ましてや高校生にもなった子だ。親がそこにいないことが、どれほどの重大事なのだろうか。世論が「一生に一度のことだから居てやりたい」と言って、我が子の入学式を優先した教師を支持する人が多いことに驚く。有名校、一流校と言われる学校の入学式や卒業式ほど親の数が多いという根底に、かえって精神面の成熟途上を感じる。■親の喜びとは何だろう。一にも二にも、子供が成長して親の手を離れていくことに尽きるのではないだろうか。一流と言われる学校や会社に有頂天になれる親だとしたら、その威厳は紙より薄い。賢明な親なら、人生はこれで絶対大丈夫、永遠ではないということをしてやるだろう。反対に不本意な出発になった子には、人生には色々な可能性があるということをして話し、励まし、親だけはどんな子であっても我が子以上に大切なものはないと思ってくれているんだという信頼感、安心感を育む機会にしくはならない。■親子関係とは、授かったその瞬間からその子が独り立ちすることを目標に築いていくべきものだ。人生は親から離れてからの方が長く、苦悩は年とともに増す。いろいろなもののおかげで生かされるいのちだが、基本的に「ひとり」の単位で生きられてこそ、平等で成熟した社会といえるのではないだろうか。それには、それぞれの立場を思いやることの出来る感性が基本だ。“ぼっち”は、乗り越える度に自信をつけてくれ成長させてくれる、死ぬまで連れ添う自分そのものだ。 Norimaru

